地域福祉活動職員の
福岡
# まなこ
地域福祉活動推進のために
No. 55　2005年　3月発行　福岡県地域福祉活動職員連絡会

## はじめに

年度末が近づき、皆さんお忙しい事と思いますが、今年度に限っては、今までに経験した事のない様な、「市町村合併」に伴う「社協の合併」も追い込みに入っているもしくは、徐々に進んでいるのではないでしょうか。

我々地職連の取り組みも、平成十六年度に事業予定していた分については、この「まなこ」の発行を終えた時点で、一応クリアということになりました。役員会としては、ホッと一息というところですが、次年度については、合併に伴う社協数の減少や、政令市（区）の正式加入の問題、会費未納社協の対応についてなど、事業実施以外の調整が必要な諸問題が出てきています。これらの件については、我々地域担当職員のみで解決できるものかは分かりませんが、できるならば、それぞれの「社協」の問題としても考えていただき、一緒になって我々の組織を育てていただきたいものです。

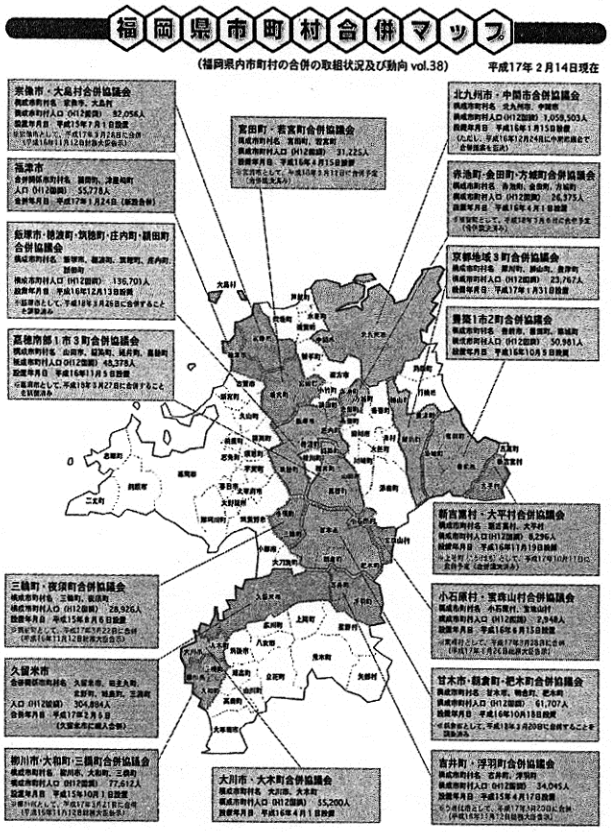
また、次年度の研修活動など事業内容については、随時皆さんの要望を受け付けて行きます（全てを採用する事はできませんが）ので、ご意見などをお寄せ下さい。

連絡先につきましては、今まで事務局が浮羽町社協でしたが、自治体の合併により、社協も合併し、うきは市社協となりました。事務局が異動しましたので、最終ページの連絡先をご参照ください。

## 社協合併による会員減の状況と政令市区社協の会員加入について

今年度はじめ、自治体数が九十六であった福岡県ですが、年明け一月から二月の間に、福間町・津屋崎町が合併し「福津市」に、久留米市・田主丸町・北野町・城島町・三潴町が合併し「久留米市」になり、その時点で九十一市町村になりました。また、今月（三月）には、北九州市・中間市で「北九州市」、三輪町・夜須町で「筑前町」、宗像市・大島村で「宗像市」、柳川市・大和町・三橋町で「柳川市」、吉井町・浮羽町で「うきは市」、小石原村・宝珠山村で「東峰村」がそれぞれ誕生し、平成十六年度内に八十三市町村になり、年度当初から十三市町村の減ということで、それにあわせて、当然地職連加入社協数も減少するという事になります。自治体の合併は今後も予定されているようですので、我々市町村社協も、ブロックの再編など考えなければならないでしょうし、地職連としても全県網羅的な会としての、組織や事業存続を検討していく機会が必要かと思います。

なお、正式な会員となっていない、政令市区社協の会員加入については、現在のところ、北九州市社協及び福岡市社協にてご検討頂いておりますので、是非ご加入いただきたいものです。



## 「地域担当社協ワーカーのつどい」（広域版）

…映像を見ながら分かるまで話してみよう…

### ■■■ 実施報告 ■■■

私たち地職連の取り組みとしては、今年度一番大きな事業となった今回のつどいですが、数年前までおこなわれていた、「社協職員のつどい」とは大きく違う、また他の研修とも大きく違うものになりました。どのように違っていたのかというと、まず、企画や運営に携わるべき「実行委員会」を設けることができなかった点です。

総会での事業・予算承認からこのつどい実施まで、時間がなかったというのは言うまでもないのですが、事務局体制もままならなかった訳ですから、当然のごとく、役員会を招集して、企画立案および運営を実施できる状態ではありませんでした。そういった意味では、会員や役員の意向を尊重しながらおこなう「みんなのつどい」になったとは言い難いものでしたが、その分、参加者ができるだけ会話できるようにと、企画内容を今までとかなり変えたつどいでした。大規模な講義形式の研修をやめて、小人数グループに分け、小さな講義部屋を四つ固定して、二日間で全室を回るというローテーション研修を取り入れ、参加した皆さんからはかなりの高評価をいただいたようです。（アンケート結果より）

また、参加の状態も当初一二〇名定員の大規模企画の予定が、蓋を開ければ参加者六〇名と予定の半分になってしまいました。これは企画に魅力がなかったのか、時期的に無理があった（はねっとの研修と日程重複）のか、もともとの定員が多すぎたのか、もしくは地職連事業に対しての不信感がまだまだあるのか定かではありませんが、しかし、逆に少人数だったことで、参加者同士が会話する機会が多かったようで、ケガの功名といったところでしょうか、今後の研修も無理せずに五，六〇名を定員としてやった方がいいとの結論に達しています。

また、事例報告者との事前打合せも行わず、「ワーカーとしての自分が何をすべきで、何をしてきたのか」を伝えて欲しいとお願いしただけで当日に臨んだのですが、各部屋ではこちら側が意図する以上のメッセージを伝えて頂けたようです。報告者の皆さまありがとうございました。

さらには、事例を聞くだけではなかなか整理がつかないだろうということで、考えたあげく、開催要項に載せていませんでしたが、急きょ熊本学園大学の小野達也先生に無理なお願いをし、完全にお任せしたミニパネルとグループ討議、レクチャーにてまとめて頂きました。（先生には各部屋での報告も全て聞いて頂き、事後に反省点などアドバイスもいただきました。ありがとうございました。）

今回の企画は、完全に準備不足だったにもかかわらず、何とか実施にこぎ着け、皆さんの気持ちが少しでも熱くなったようですので、ホッと胸をなで下ろしていますが、これも、地職連からの無理なお願いに対して、皆さんが親身になってご協力いただいた賜だと、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

以下に、各部屋での報告内容と、参加者の感想を掲載しますので、参加できなかった方は、是非お読み頂き、参加した方々がどんな事を感じて帰ったのかイメージし、ご自分の仕事にも結びつけて考えてみて下さい。

## ●●● 各部屋の事例報告内容 ●●●

「ふれあいネットワーク組織を考えてみる部屋」

事例提供・説明者　水俣市社協　田代久子　氏

「水俣方式」と言われるふれあいネットワークの推進方法について、「縦糸に力を　横糸にまごころを」というテーマで、お話し頂きました。そこには、さまざまな工夫や仕掛けがありました。

第一回目には該当地域内の主だった人の共通認識づくりをされ、「懇談会」の日程決定やそのチラシ配布依頼を行います。第二回目の懇談会は該当地域内の全

住民が対象です。ここでは、社協活動やふれあいネットワークの説明や啓発ビデオ（独自に制作）の上映、少人数に分かれてのワークショップ、そして十日以内の発足会開催の日程決定等を行います。第三回目はふれあい活動員希望者を対象に発足会を開き、訪問対象者の選定や活動連絡会の日程等を決めます。安否確認を兼ねた訪問では、初回に緊急連絡カードを配布し、訪問了解を得ます。ふれあい活動員は2～4人で構成する5つぐらいのチームに分け、担当家庭を限定せずに各週ごとに交代でローテーションを組んで訪問活動をします。又、活動連絡会では情報交換やケース検討をしながら連携を図ります。特徴としては、推薦型や委嘱型ではないので誰でも参加できる事や、人によって「気づき」が違うため潜在ニーズの発掘につながる事、ローテーションを組むため各ふれあい活動員の負担が軽く継続しやすい事、対象者が自分の相手を選ぶ事ができる等があげられます。地域主催の「ふれあいいきいきサロン」や「福祉施設見学」「出前福祉講座」「調理実習」、市健康管理課主催の「健康教室」「栄養教室」「認知症学習会」等も活動メニューに入れられています。第一回目以外の司会や受付は地域の方にお任せし、活動連絡会も社協は第一回目のみ参加し、サロンには出ずに使い捨てカメラを渡して撮ってもらうそうです。地域独自で取り組めるメニューや行政の専門職にお願いできることはお任せし、社協は「住民全体を対象にした福祉研修会」や「リーダー交流会」「アンケートによる実態調査」等を担い、ワーカー自身が率先して行動して身動きが取れなくならないように心がける事が大切だと話されました。

活動を推進するうえの留意点を、田代さんは十六あげられました。そのいくつかをご紹介致します。

①組織のための活動ではなく、活動のための組織
②地域の中に出向き、地域の中で考える
③一人の百歩より百人の一歩を目指す
④お願いするより問いかける姿勢
⑤「記録」や「まとめ」を怠らない。
⑥「想像力」とそれを具現化する「創造力」が必要
⑦まちづくりの良きプロデューサーになること
⑧タフであること
⑨とにかく「やりながら考える」こと
⑩嫌いな人をつくらない

現在は三本目の啓発ビデオ「地域リビング」の制作や児童虐待に取り組まれておられるそうです。田代さんの情熱とパワーに、元気とたくさんのヒントを頂きました。

報告者　山本ベティ和恵（桂川町社協）

**「ふれあいいきいきサロンを考えてみる部屋」**
**事例提供・説明者　飯塚市社協　藤川征典　氏**

今では、サロン活動＝飯塚市と言われる程、先進地になっていますが、その仕掛け人である藤川さんの今回の話は、ワーカーにとって大切なことは何かということを、自分の体験談から語られ、この部屋は『熱かった』と皆さん感じたのではないでしょうか。

藤川さんは、“ワーカーは地域に出てなんぼ、仕掛けが大事”と語られます。飯塚市では以前から福祉員制度やネットワーク委員会等の地域組織があったことと、藤川さん自身が共同募金担当の頃から、町内会長さんたちとは顔見知りだったこともあり、地域には入りやすかったようですが、更に顔を売り、多くの方と地道に信頼関係を築いていった結果、思いが通じ、サロンを始めとするいろんな社協事業への理解協力をしてくれるようになったそうです。また個人的にも、市や団体等の行事に積極的に参加していき、特に山笠に参加することで、住民との一体感をより強くし、認めてもらえたという実感を味わったそうです。

「藤川さんが言うならやってみよう」と動いてくれるのは、このような住民との信頼関係があってこそだと思います。しかしその過程では、失敗も数多くあり、人間関係のドロドロさの中に入ることもあり、出る杭が打たれることもあり、そう簡単ではなかったそうですが、何が悪かったのかを振り返った時、それは段取りの悪さだったとのことです。

ワーカー自身が思いや夢、理想等、熱意を持って地域に入って行かない限り、伝わらないし動かない。それができなければ、社協ワーカー失格だと言われたことを皆さんはどう感じ取ったでしょうか？

飯塚市における「ふれあい・いきいきサロン」（住みなれた地域で支えあうまちづくり）のビデオは、出演者の笑顔と笑い声が印象的で、参加者やボランティアの誰もが楽しさを共有していることが

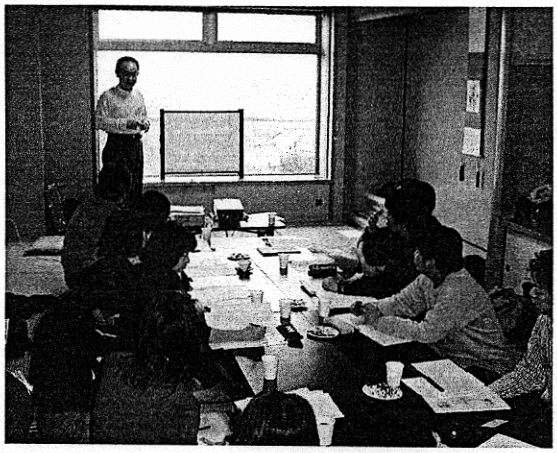
伝わってきました。

サロン活動は、何ヶ所や何回等、一見数で評価されがちですが、介護保険認定漏れ者や予防の問題を中心に、昔の長屋や井戸端会議のようなつながりづくりを、住民が必要と思って行えているかという点を訴えながら組織づくりを進められています。

サロン活動は、住民主体活動の一つの方法に過ぎません。福祉問題の発見、解決にいかにつなげるかも、ワーカーの働きかけにかかっています。

地域高齢化率やニーズ調査、サロンアンケート等の調査。サロン日を狙った空き巣対応として、当日に参加者宅を男性協力員が見回る見回り隊の結成。サロン開催地域内の理髪店が、サロン前日になると参加者で満杯状況。看護士や特技ボランティアの登録利用。行政の出前講座をサロン開催型へ変更等、少しの事例ではありましたが、飯塚市ではサロン活動を住民たちが必要と感じ、自分たちで評価、見直しを行いながら住民主体の地域づくりへと広げていっていました。そしてそこには、藤川さんの熱意と、社協ワーカーとして、また時には一個人としての地域との地道な関係づくりや仕掛け方が大きかったことを感じさせられた部屋となりました。

報告者　花岡早織（桂川町社協）



**「福祉移送サービスを考えてみる部屋」**

**事例提供・説明者　直方市社協　山下健一郎　氏**
**春日市社協　園木崇嗣　氏**
**浮羽町社協　物部美加　氏**

この部屋では高齢者や障害者などの外出困難な方を支援する「移送サービス事業」を題材とし、支え合う地域づくりのあり方や当事者の人間としての生き方を尊重できる社会づくりというものを、考えてもらうきっかけとなればと開設しました。

春日市・直方市・浮羽町3市町で事例発表を行い、浮羽町社協の事例ではビデオ上映と担当の物部さんから発表をしていただきました。

山間部が多い同町では、高齢化と交通アクセスの少なさは「日常生活のなかでの移動という問題」を浮き彫りにしているそうです。また、「山間地区の移動手段に関する意識調査」を行った上で、課題を明らかにし、以前から行っている移送サービスを含め山間部の高齢者が移動しやすい最善の方法を探り、町にも調査の結果を報告したそうです。

物部さんは、『生活に欠かせない「衣・食・住」の衣は移動の移ともいえるのではないか』と言われました。

春日市社協の事例発表では園木さんからお話しを頂きました。

春日市は人口密度が高く、JR・西鉄・路線バス、更にコミュニティバスと交通アクセスはあるものの、移動のニーズはそれだけでは解決できない問題だといえます。

園木さんは、「私たちが時間と場所を問わず移動できるように、障害を持つ持たないに関係なく移動できる、それが本当のニーズではないか」と言われました。

お二人の発表と別に、小人数によるグループ討議の時間も設け移送サービスを行っている社協、行っていない社協とそれぞれではありますが、各社協同士の情報交換なども行いました。

長崎市社協の吉川さんから、「長崎では、坂や階段が多く、自宅から、車を乗り入れる場所までの移動が困難」と地域特有の問題を言われ、参加者一同うなる場面もありました。

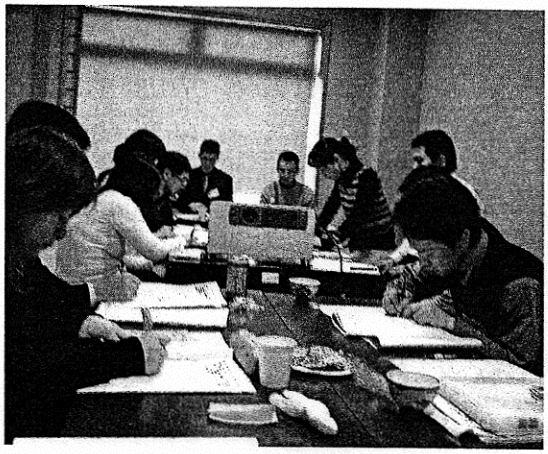
さて、最後に直方市社協の山下さんのコメントで説明を終わります。

『来年より、利用者からお金を徴収する移送サービスについては市町村の設ける“運営協議会”に申請書を提出し、認可を受けない限り、取締りの対象となるこの移送サービス事業。

その申請には担当者にとってさまざまなハードルが存在します。

これから「より当事者側に立った事業を」と考える移送担当者にとって、このような地域連絡会形式のお互いの連携の場が必要になるのは間違いない。』

報告者　能塚治一郎（小郡市社協）



「福祉問題調査活動（福祉マップづくり）を考えてみる部屋」

事例提供・説明者　浮羽町社協　國武竜一　氏

この部屋は、「福祉問題調査活動（福祉マップづくり）を考えてみる」というテーマで、浮羽町社会福祉協議会の國武竜一氏より事例提供及び説明をいただきました。

この福祉マップにたどり着いたのは、まだ國武氏が社協に入ってすぐの頃、自分の仕事（地域担当職員という職種）は何なのか考えたことから始まった。分からないままでは悔しいとのことで國武氏、ちょっと勉強してみたら「社協は住民主体の地域福祉活動の推進役」という大切な役目を担っているらしいと分かるが、じゃあ「住民」って何？色んな疑問がまた出てきた。地域（サロン・福祉座談会・福祉大会）に出てみたが、なかなかニーズを拾い上げるところまで至らない。地域住民といっても地域の世話人さんなど一部の方としか接することが出来ない。どうやったら、もっと地域に入り込めるのか？どうやったらみんなの関心事として、みんなが関わることが出来るのか。國武氏は悩んだそうです。

そんなとき、「よく考えたら自分も住民じゃん！」ということに気が付いた國武氏。ならば自分の集落（8軒）の把握をしてみようと思い、模造紙に地図を描き問題点を落としていった。まずは、世帯構成から見ていくと、たった8軒の中でも、高齢者独居世帯、母子世帯、身体障害者世帯などなど、様々な状況の世帯があるのに気付く。次に、住環境に関しても、危険箇所がたくさんある事に気付く。さらに、ゴミの散乱状況や景観美化、防火用水、防犯灯、子どもの遊び場など書き入れていったら、何だか賑やかな地図になってしまった。これが福祉マップのきっかけになったようです。

これは、結構おもしろいし、熱中するし、何より課題が一目で分かる。これは福祉活動の取り組みに使えると思った國武氏。「ふれあいのまちづくり事業」の一環として設置していたモデル福祉会に、自分の作った地図を持って行って、一緒に考えてもらったところ、区民が総出で関わることができ、いろんな人たちからも意見を吸い上げるのにいいのではないかということで、みんなで知恵を出し合いながら、数回にわたり話し合いを持ち実現にこぎつけた。

ただ、この「福祉問題調査活動（福祉マップづくり）」は、小地域福祉活動の自発的展開をねらった、単なる「きっかけ」づくりであって、住民自身で問題を発見し、考え、改善し、社協や行政につなげる。そのような自分たちの地域を良くするための、「ちから」をつける活動であるとのことでした。

この取り組みは、『地域組織化』の一つであるが、みんなが感じることのできる、平均的な課題は取りかかれるにしても、実際に課題当事者が抱えている重たい課題は、マップではでてこないし、当事者組織の力で解決していこうという動きにも限界がある。だから、自分（地域担当職員）のやっている仕事、社協が取り組んでいること、地域が実践していることをうまく融合させ、最も相乗効果が出るように、自分たち（ワーカー）が、それぞれの関連を見つめ直す必要がある。そして、新たな発想と取り組みを取り入れていくことが必要である、と國武氏は熱く語られてありました。

報告者　池松昌亀（大刀洗町社協）

## 参加者の感想は…

### 「社協ワーカーのつどいに参加して」

須恵町社協　平田　重彦

社協職員の皆さんこんにちは。須恵町社協の平田と申します。この度、はじめて福岡県地域福祉活動職員連絡会主催の研修に参加させていただきました。

4つのテーマのなかでも特に印象に残ったのは「福祉問題調査活動（福祉マップづくり）を考えてみる部屋」の講義でした。福祉マップづくりをひとつのきっかけに、老若男女の住民を巻き込みながら、「地域について楽しみながら考える」を、具現化した事例として紹介していただきました。特に参考になったのは、担当する事業の目的・根拠・実践・評価を整理している点でした。さらにそれを文章にあらわしていたので、受講した側にとっては、とても興味深い内容でした。私は社協職員として6年目となり、一通りの事業は把握したつもりでいますが、中には「困っている人がおるけん、当然必要だろう」などの漠然とした気持ちで取り組んでいる事業も、少なからずあったように思います。そこに問題意識をもつきっかけになったのが何よりの収穫でした。

坂本龍馬は私利私欲を捨て、日本の行く末を案じ、国事に奔走（ボランティ